

【平成 25 年度倫理学専攻講演会講演要旨】

日本思想における靈魂の問題

吉田 真樹

こんにちは。吉田です。よろしくお願いいたします。同期の吉原先生からのご依頼ですので、精一杯務めたいと思います。

今日の講演のタイトルは「日本思想における靈魂の問題」というちょっと大雑把なタイトルになっております。これはどういう意味なのかというと、靈魂ということを考えてもいいのではないかと、ということです。こういう問題があるよ、こういう問題を知っておいた方がいろいろわかってくることもあるよという感覚です。もう少し堅くいいますと、一昨年の震災に際して、改めてわれわれ日本人の「死」に対する知恵の欠如が露わになったということがあったと思います。じゃあどうすればいいのかというときに、「死」について、かつて日本人、あるいは日本思想はどのような知恵をもっていたのかを知る必要があります。今日はその中でも「死」に対する知恵の最も古い層をなす「靈魂」の思想について考えてみたいと思います。

（１）現代における死の隠蔽

まず、宮崎駿監督作品「千と千尋の神隠し」の主題歌としての「いつも何度でも」を聞いてもらいたいと思います。みなさんは何回もこの映画を見ているという前提でお話します。

今、歌の一番を聞いていただきました。みなさん、この映画の内容を少し思い出しつつ考えてみてください。一番の歌詞末尾近くのところ、「生きている不思議 死んでいく不思議」というフレーズがあります。これはみなさんどう思いますか。まずは普通の捉え方でいいのですが、「生きている不思議 死んでいく不思議」ということをこの映画は描いていたのでしょうか。思い出してみてください。

私は映画館でこの映画を観たときに、観終わって、最初はよくわからなか

ったということもありますが、この歌を聞いて、「生きている不思議 死んでいく不思議」なんか全然描いていないじゃないか、ふざけるな宮崎駿（監督）というふうに思ったわけですね。みなさんはどう思ったでしょうか。普通に考えると「生きている不思議」は描いているといってもいいかもしれませんが、「死んでいく不思議」というのは描いていない。そう、とりあえずはいえらると思います。

これは宮崎駿監督一人を取り上げてどうこうという問題ではないのです。宮崎駿という監督は現代日本で最も影響力のある監督といわれています。逆にいいますと、同時代性を極めて優れた形でもっている監督です。ですから宮崎駿は現代日本という時空を映す鏡として極めて優れている存在です。ある種の天才だと思います。

この主題歌は実はこの作品に合わせて作られたものではありません。後から、宮崎駿監督の趣味で付け加えられた歌なのです。作品の中に死が全く描かれていないのにもかかわらず、主題歌としてこういうものを入れて何かごまかしているように見えても仕方がないところがあります。これをここでは、現代における死の隠蔽という問題の一つの現れとしてまず捉えておきたいと思います。

こういうことはよくあるのです。別にこの映画を取り上げなくても、みなさんの生活の周りからは死が可能な限り排除されています。例えば、身内の方が亡くなるときも病院で亡くなることがほとんどでしょう。核家族であるとか家族の単位が小さくなるにつれて、われわれが死に触れる機会はどんどん減ってしまっているということがあるわけです。そのようなわれわれを顧客として想定する以上、「千と千尋の神隠し」は死を隠蔽しなければならないという面をもっています。大衆性を基盤とする宮崎駿監督作品は、鋭い嗅覚で同時代性を察知・吸収して体现し、われわれの一面を露わにしているわけです。

こういった死の隠蔽がわれわれの生を取り巻く現状なのですけれども、そこに大震災がありました。震災では本当に沢山の人が死んでしまいました。それをどうすればいいんだろうということなのです。どうしようもないんですけどね。実際、地震が起こって沢山の、沢山という以上の人が死んでしまっていて、例えば私はどうすることもできなかったわけです。ただ、そんな

私にとっても何か大きな意味があるはずだろうと考えていまして、その意味というのは、私が被災して亡くなった方たちと関わる関わり方として、靈魂の問題、日本思想の中の靈魂の問題を、私がとりあえず、完全な正解に至れるかはわかりませんが、形をつけようと、それが私の義務になるんだろうというふうに考えております。別に震災が起こったからやり始めたわけではありませんが、なぜか私は昔から死生観とか靈魂観みたいな論文ばかりを書いてきました。改めて、ああなんか自分はそういうやつなんだなというふうに自覚しまして、これから、今日のお話もその一環なんですけれども、そういう作業を進めていきたいと思っております。

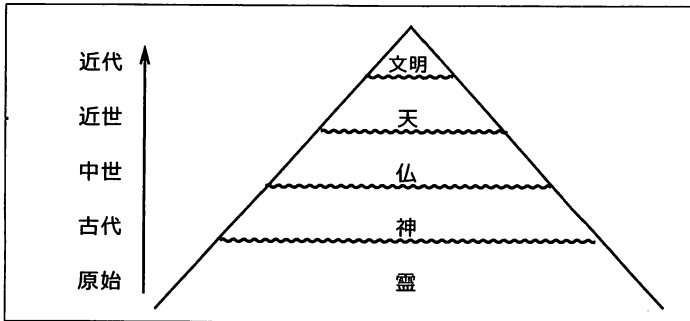
この「千と千尋」の話なんですが、実はもっと先があります。まず普通に軽く観ますよね。観ると死が描かれていない。歌に「死んでいく不思議」というフレーズがあるので、われわれは少し考えさせられます。そしてまずは、ふざけんな宮崎駿（監督）ってなるのですが、その後、本当は死があるんじゃないかというふうにしつこく考えていくとだんだん見えてくるものがあります。それについては、結論としては靈魂という問題が大きくあるということになります。これから日本の靈魂観を原始時代から辿っていきたいと思いますが、「千と千尋」については時間があったら最後にもう一度触れます。では、本論に入っていきます。

（２）原始時代の靈魂観

これから原始時代、古代、仏教、近世（仏教以外）の靈魂観を見ていきますが、一時間半で全ての時代についてお話することはそもそも無理です。ですから最も重要なところだけを取り出してお話しし、なるべく一つでもみなさんの印象に残るようにできたらと思います。

まず靈魂観を捉える前提として、日本の思想史の各時代がどのようなものであったかについて図によって確認しておきたいと思います。これは非常に大雑把な概念図なので、あまり厳密なものと捉えないようにしてください。日本の思想を考えるときに古代、中世、近世、近代という時代があって、われわれは一番上の近代の世界に生きています。こういうふうに図を描いてみます。日本文化は（日本思想もその一部ですが）重層しているといわれます。

これは和辻哲郎のいう「日本文化の重層性」という問題です。



みなさんにとってごく当たり前のことかもしれませんが、ふまえておいた方がい考え方です。これを絵にしてみると、古い時代の方が裾野が広いのです。われわれはここ（近代）から上で生きています。このそれぞれの時代に人々が何を信じて生きてきたのかという問題について、佐藤正英先生がいわれている⁽¹⁾ことを私が図にしてみたものです。

近代のわれわれは何を信じて生きているのかというと、文明を信じて生きています。そのほかの時代も何を信じて生きていたのか。思想史の通説的な考え方でいきますと、古代は神を信じていたんだろうといわれます。中世は仏を信じていたんだろうといわれます。これらの神・仏に匹敵できるかという問題はありますが、近世は天を信じていたんだろうといえると思います。これは思想史図式の定番中の定番の捉え方です。古代は神道、中世は仏教、近世は儒学が盛んになったという図式です。これを重層性という観点から考えてみますと、今われわれはここ（近代）で文明を信じて生きているんですけど、その根っこにはこういった神・仏・天があるわけです。天を信じることもまだ残っているでしょう。「お天道様が見ています」といわれるように、誰も見ていないからといって悪いことができないという方もみなさんの中に多くいらっしゃるのではないかと思います。仏教もわれわれの中に染みこんでしまっていて、ほとんど無意識のものになっているといえます。そして、他者としての神に対する感覚もわれわれはいまだに鋭く根強くもっているといえます。

ところが、重層性なんか関係ないという立場、一番上（近代）だけで生き

ていきたい、下（近世・中世・古代）は関係ないという人たちもありえます。ですから何も信じない人たちというのは、この近代の立場から下を全部否定しようとしている人たちであるわけです。今から靈魂のお話をするに先立って、はっきりさせておきたいのは、私はここ（近代）だけの立場には立ちたくないということなのです。私は日本倫理思想史、日本の思想を専門としていますので、古い時代の方が面白い。そこに非常に深いものを感じます。それに対して近代の日本思想はあまり面白いと思えない。それはなぜかというと、恐らく近代の日本思想はこの下（近世・中世・古代）の部分の切り捨て、忘れてしまったからではないかと思います。

この図をよく考えてみると、もう一つの下時代に靈というのがあったはずです。ですからもう一つ原始時代という層を付け加えておきましょう。われわれは上（近代）の方で生活している文明人のつもりでいますが、足元というか深いところにはこういうものが残っているはず。靈魂の話をしようとすると、信じる・信じないという問題がすぐに起こってしまいますが、これは大きい問題で、ここで引っかかると何も考えられなくなってしまいますので、最初にこのことをお話ししておきたいと思います。ここ（近代）の文明の立場に立とうとすると、下（近世・中世・古代・原始時代）はいらないという立場がありえます。それは信じないということです。ところが、日本文化は重層していると考えてみますと、靈というのは一番下にあるわけです。文字がない時代からそういう考え方があったということは、これはかなり根深いものなわけです。これが整理されていって神道的なものになったり、さらに仏教が入ってきて靈や神と交渉があって、さらに天もあって、それをふまえてここ（近代）で生きてるんだというように、自分自身のことを下から考えることもできることになります。下から考えると、土台なのだからあるよということになりますよね。上（近代）だけに立つと、神なんかいないし、仏なんていないし、天なんてないし、靈なんてそんなのあるわけないし、上から見るとそうなるのですが、下から考えると重層しているのだからあるに決まってるというふうになるわけです。

私の立場は、信じる・信じないでいうと信じる方なんでしょうけれども、今までほとんどの人類が靈というものはあると考えてきたのです。今われわれの中で靈がないと考えている人たちというのは、人類の歴史の中ではごく

ごく例外的な存在なので、人類の、地域は日本に限ってもいいのですが、今までの多くの人たちの、人間の歴史が始まる前からずっとあったという、こちらの下の部分を私は重視したいと考えています。知恵はこの上（近代）だけに立って下を見て、例えば上から目線で馬鹿にしながら江戸時代をつかまえようとか中世をつかまえようとかしても、何も得られるはずがないのです。ですから、私がお話する前提としては、下から考えたいのだということになります。

しかし原始時代というのは怪しいですよ。文字がないのですから。本当にそうなのかとみなさんの中では今、疑いの心がどんどんわき上がっているのではないかと思います。原始時代の靈魂観をつかまえるのは非常に難しいのですが、こちらをご覧ください。考古学の入門的な本からお借りしてきた絵⁽²⁾です。これは縄文時代前期、だいたい7000年前の、みなさんの知っている言葉でいうと環状集落です。環状集落とは何かというと、真ん中にお墓があるのです。真ん中にお墓があつて、住居が同心円状に広がっている。一番真ん中にお墓があるのは、非常に沢山見られる形だそうです。縄文人はお墓を最も大切にしていたことがわかります。さらに、お墓の一番中心にはどういう人が祀られているのかというと、一番偉い人、つまり祭祀者が祀られていたようなのです。何の記録もないので難しいところですが、一番真ん中に一番重要な人を祀って、どうもその力を使おうとしていたようなのです。集落の一番中心ですから、そこは集落の全ての人々の意識が集まるところです。だから、中心の中心に一番重要な人が祀られてくるのだと考えられます。次の絵もそう考えてよい根拠となるものです。

次の絵⁽³⁾は縄文時代後期前半、だいたい4500から4000年前の、有名な大湯の環状列石です。丸く二つの集落（万座環状列石と野中堂環状列石）が描いてありますが、冬至の日の出と夏至の日没の太陽がその真ん中を必ず通るように作られているそうです。これは非常に示唆的なことだと思います。一番日が短いときの太陽がここを通る、あるいは一番日が長いときの太陽がここを通る。必ず真ん中を通るのです。冬至・夏至というのは太陽がいつどこを通るか一番つかまえやすい日だといえます。その日に彼らはここで太陽をつかまえたのです。そのつかまえる係の人が祭祀者の靈魂なわけですからこそ真ん中に埋められている。昔いた優れた祭祀者がそこに埋められ

ていて、その力を借りる。埋められているのは死者あるいは靈魂としての祭祀者ですが、それとはまた別に、生きている祭祀者もいるわけです。生きている祭祀者は祀られている祭祀者の子孫かもしれません。この生きている祭祀者はもちろん太陽をつかまえたい、その力をもらいたい。それがこの集落の人たちみんなの思いでもあるわけです。もちろん、つかまえたいけど難しい。祭祀者ですから自然の神に対する何らかの特殊な能力、研ぎ澄まされた感覚をもっているはずなのですが、生きている者の力だけでは足りないというときに、かつての祭祀者、靈魂になった祭祀者の力を借りるという形になっているわけです。冬至と夏至の太陽にお墓の真ん中を必ず通らせるということから、少なくとも今私がいったようなことまでは考えられることだと思います。

みなさんは本当かなと思うかもしれませんが、考古学のこういう世界は解釈するしかないところがあります。私は考古学者ではないので掘っていませんし、掘った結果を見て、これはどういう意味なんだろう、お墓の一番中心を冬至と夏至の太陽が必ず通るように集落を作っているのは何なんだろうと考えるだけですが、これは思い切っても解釈しておかなければいけないものだと思います。またこれは解釈の余地が極めて少ない例であると思います。一応、原始時代にはこのような靈魂観があったと考えておきたいと思います。

祭祀者が死んで靈魂になっているということは、死とは靈魂と肉体の分離として考えられているといってよいでしょう。神祀りに優れた死者の靈魂が永続し、死後も靈魂として子孫による神祀りを助ける存在になっていたのです。

私がこういうことを知ったときには物凄い衝撃を受けました。こんなことがあるのかというくらいの衝撃です。どうして衝撃があるかというと、この原始時代の思想は土台となって、次の時代の神の思想を準備していくわけです。そう考えてみると、『古事記』にこの原始時代の思想が構造として生きているということがわかってくるのです。このことに私は非常に驚かされました。『古事記』というのは、後で少しお話ししますが、非常に難しい抽象的な作品です。それを縄文時代からの連続性のうちに捉え直すと、原始時代のこととして今お話したようなことをもっと抽象化し、特化し、洗練させるということが『古事記』において起こったのだと捉えられることになるのです。

原始時代の靈魂観は『古事記』の捉え方さえも大きく変えてしまうものなのです。

（３）古代の靈魂観

ここは少し難しいかもしれないので、予め概要を示しておきます。

原始時代からの死後靈魂観が、神道的に特化して祭祀者天照大御神のみに極少化・最尊貴化する(しかも不死！)。また仏教的に特化して全ての存在の死後靈魂が主題化されることになる。ここから、死後靈魂は仏教のものと感ぜられるようになる。

縄文時代は優れた祭祀者が真ん中に祀られている。では他の人たち、死んで周りに祀られている、周りのお墓に埋められている人たちはどうなったんだという問題があります。さっきの環状集落の構造から、そこまではわからない。そのときに『古事記』はそれでいいという考え方なのです。ここでは『古事記』を「神道」の代表と考えることにしますが、一番優れた祭祀者の靈魂以外は どうでもいいという考え方なのです。そんな周りの、祭祀者でも何でもなし、そういう能力ももっていない人たちの靈魂なんていらないう『古事記』は考えていることになります。

それに対して「仏教的に特化」とはどういうことかということ、周りの人われわれ一人一人が靈魂になるのだということを考え始めるということなのです。そのため、われわれとか一般の人々にとっての靈魂は仏教が担うもののだというように感じられていくようになります。

少しだけ確認してみたいと思います。これはいわれてみれば当たり前なのですが、『古事記』を靈魂という観点からずっと読んでみますとほとんど出てきません。後で見ますが、イザナキ・イザナミという二人の神がいます。イザナミが死んでしまって黄泉国に行って腐った体で出てくる場面があります。われわれは通常「死」という問題が日本でどのように考えられてきたかということを考えようとして、この場面を読んでしまう。私もそういう論文を書いたことがあります⁽⁴⁾。ですから、何となくイザナミが死者であるという

ところで、靈魂というのはあるのだらうと先入観をもってしまっています。ところが靈魂ということだけに集中して読んでいくと、どこにも書かれていないのです。

私は大学に入って初めて『古事記』を読んで、恥ずかしながらその後二十年くらいそういう簡単なことがわからなかったんですね。ですから、このことに気付いたときは私にとって本当に大きい衝撃がありまして、じゃあ『古事記』っていうのは靈魂を排除するテキストなのだろうかとなったわけです。なぜ排除するのかと考えていくと、『古事記』では「天照大御神だけが靈魂をもつ、靈魂は非常に尊いものなので一般の神々、一般の人々はそんなものをもたなくていい、天照大御神だけがもてばいい」という、そういう靈魂観になっていきます。これが靈魂の極小化ということです。いいかえれば、最尊貴化、即ち唯一の靈魂というとても尊い靈魂のみを考えるとという方向になっていく。それは『古事記』がある種特殊な、かなり高度な抽象化を経た靈魂観をもつ作品になっているということを示したものだといえます。

具体的に天照大御神の靈魂が出てくるのは、天孫降臨に際して鏡を渡して、それを自分の御霊と思えといっている場面です。『古事記』はこの場面をあまりにも大事なものとするために、そこ以外一切霊という言葉を使わないテキストになっているのです。原始時代に靈魂という考え方が非常に盛んであり、集落ごとに過去の優れた祭祀者が墓の中心に祀られていたことを考えてみると、優れた祭祀者は沢山いたはずですね。集落ごとにいたわけですから。ところが、『古事記』は祭祀者が沢山いるということを認めないで、全部まとめて一人にしてしまうということです。天照大御神は唯一の最も優れた祭祀者であり、巫女なのです。巫女であるということは『古事記』にちゃんと書いてあります。

次に、靈魂が他のテキストの場合にどうなっているのか、『日本靈異記』を見てみたいと思います。これは日本最古の仏教説話集ですが、その中に靈魂がばんばん出てきます。『日本靈異記』は研究上不幸だったテキストで、極端に言えば「こんなの仏教を理解していない、日本に仏教が入ってきたときに日本人のレベルが低くて仏教を理解できなかったのだ。だから、こういう昔話のようなお話ばかりで、仏教哲学も何も理解していない、こんなの仏教

の名に値しない」という、不当な評価を受けたまま最近までずっと来てしまったものです。そういう学問的な偏見というか哲学的な仏教を尊ぶ立場を括弧に入れてみると、これは実は、『古事記』とは逆の方向から、「靈魂だ」といい始めたテキストなのです。

またもお恥ずかしい話ですが、私は大学に入って『日本靈異記』を読みました。それからこれは何だろうとずっと考えて、十五年くらいの間よくわかりませんでした。やっと最近わかってきたのです。

『日本靈異記』のお話のパターンを、上巻の序で見てください。例えば、ある人がお寺のものを借りて返さなかった。借りたものは返さなければいけないのに、返さないまま死んでしまった。そしたら牛の子に生まれ変わって、労働力となってお寺に借りを返さなければならなくなったという話。また、仏や僧侶を誹ったために口が曲がってしまったという話。これらはマイナスの方向性をもつ話ですが、プラスの方向では、生きながら幸いを被る話などというのがあります。

こういったことを見聞きした人は、みんなと一緒に食事なんてしてられない。自分のやったことが原因となって、それが結果として必ず出てくるというのですから。われわれの行為が（仏教的な意味で）善い原因であれば、必ず善い結果が出る。われわれの行為が悪い原因であれば、必ず悪い結果が出る。「因果の報」とあるのは、そういう考え方です。これは非常にシンプルな考え方です。こういうことを見聞きしたら、どうしても自分に当てはめてしまいますよね。そうすると、自分が過去に行った悪い行為が思い返されてきます。必ずその報いが来るよというのだからびっくり仰天しちゃうんですね。今テーブルでみんなでご飯を食べているときにそんな話を聞かされたら、驚いちゃってもう「どうしよう俺はもうすぐ悪い死に方で死んでしまう！」などと心配になってくる。自分のかつての悪い行為を省みて、真っ青になってさっさと帰る。おしゃべりなんかしてられない。『日本靈異記』はそんな話を集めたものです。

ついでにいうと、今の真っ青になる人の話では意識が自己に向かっていますよね。仏教は自己に向かう思想です。もう一方で、神道は神様ですから他者に向かう思想です。単純すぎるかもしれませんが、こういうふうに押さえておいた方が今日のお話がわかりやすくなるかなと思います。

さて、『日本靈異記』に出てくる靈魂の話はだいたいこんなパターンなのですが、それをふまえた上で、『日本靈異記』の上巻最初の話を見ておきたいと思います。へんてこな話で、謎が沢山あります。仏教説話集の最初のお話なのですが、こんなことが書かれています。一番最初に「^{いかづち}電を捉ふる縁 第一」⁽⁵⁾とあります。「縁」はお話というくらいの意味です。登場人物が少師部^{ちひきこべ}の^{すがる}栖軽、これが主役になります。この人は雄略天皇の隨身です。お話に入ると最初に、雄略天皇が后と性的交渉をしていたと書いてあります。仏教説話集の最初になんでこういうことが書いてあるんだろう。ここから始まっているということが非常に大きな謎です。そのときに、栖軽は天皇の腹心の従者だったので、間違っってその部屋にびゅっと入っていっちゃった。それで雄略天皇は恥ずかしくなって性的交渉をやめたと書いてあります。そのときに雷が鳴ります。それを聞いた雄略天皇が栖軽に「お前あの雷様をお呼びできるか」といったら、「お呼びできます」といって行ってしまった。そして実際に迎えしてしまったというお話になっています。

この最初の段は非常に難しいのですが、直接靈魂の話ではないので省略しまして先に進みます⁽⁶⁾。栖軽が雷を呼びに行きます。普通だったら、こんな呼べないのではないかと思うのですが、栖軽は非常に真っ直ぐで、雄略天皇の命令には何でも答える従者でしたので、「はい」と素直に引き受けたのだと思います。そして本当にお呼びしてしまうのです。栖軽が「天皇がお呼びなのだから断れないぞ」とまるで脅しのようにいうと、雷が落ちてきました。落ちてきたので、神様を扱う専門の役人と神輿を呼んで、雄略天皇の前まで連れて行きます。そのときに雷は物凄い光を発するんですね。雄略天皇はそれを見て畏れます。「これは本当の神様だ」と畏れをもつのは、天皇は神を祀る専門家、即ち祭祀者ですので、天皇として当然の、正しい行為で、すぐさま雷神をちゃんとお祀りして帰ってもらいます。

しばらく経って、栖軽が死にます。栖軽が死ぬと、死んで初めてわかる、最高の従者だったという思いで雄略天皇はお墓を作りますが、思い余って「^{いかづち}電を取りし栖軽が墓」と碑文を書いてしまいました。「お呼びした」というのと「取った」というのではだいぶ違いますよね。それなので、俺は取られていないぞと雷神は怒りまして、この墓を壊してやろうとどーんと落ちてきます。とんでもない碑文をもつこの墓を壊そうと落ちたのですが、雷神は

墓に挟まれてしまい動けなくなります。雄略天皇はこの雷神を助けたと書いてあります。栖輕の墓は雄略天皇の思いを受けて、雄略天皇がいった通りに、本当に「取った」のです。雄略天皇はもう一度お墓を作って、今度は「生きても死んでも電を捕りし栖輕が墓」と書きます。生きているときも「取った」し、死んでも「取った」と。前のときは栖輕への思いの余り「取った」と書いてしまった。それに怒って雷神が落ちてきたのにもかかわらず、栖輕の墓は雷神を挟み取り「取った」というのが現実になった。栖輕が死後に「取った」ことは間違いないでしょう。

これが死後の靈魂なのです。お墓に宿していると考えられます。なぜ仏教説話集の最初にこういう話が出てくるかがずっと謎だったのですが、これは雄略天皇の時代と記されていて、明らかに仏教伝来以前のお話です。そういう話がわざわざここに載せられている。つまりこれは仏教の前提として、靈魂があるのだという話なのです。みなさんはあまり感動しないかもしれませんが、日本の仏教が一番最初に靈魂の話をもってきたというのは物凄いです。靈魂を最初にいわないと、仏教は始まらないという位置づけになっているわけです。しかもここに出てきた靈魂は、天皇の従者の靈魂だったということが大きなポイントで、天皇の側からいうと、死んでも忠実な従者を天皇はもちうるという話になっています。この靈魂像は恐らく衝撃的なものだったでしょう。日本の仏教は天皇が中心になって受け入れていくということがあり、しかもここでは靈魂なんだということを強く打ち出していて、これは今までずっと考えられてきた日本仏教史、日本仏教思想史の全部を考え直さなくては行けなくなるくらいとてつもないことなのです。そういうことを『日本靈異記』上巻の冒頭話から読み取ることができるのです。

ここの栖輕の靈魂は方向性が決まっていますよね。自分は絶対天皇の忠実な臣下なんだということは死んでも動かない。方向性が極めてはっきりしています。これは靈魂として正しい方向づけをもった者とされていると思いますが、他の話を見ていくとそうではない場合が多く、前世でAがBを殺して、今度生まれ変わってきたB'がAを殺してとか、何回も何回も殺し合いを続けながらずっと輪廻しているというような話も出てきます。これは正しい方向づけがなされていない靈魂なわけです。こういうわれわれの、一般の人々の靈魂は、特別な存在である祭祀者の靈魂などとは違って、方向性を正しくも

たないと悪い行為を行い、悪い報いを受けるということがくり返し描かれることになるのです。

『日本靈異記』では聖徳太子が重要になってきます。もちろん生きているときも出てくるのですが、死んでからも靈魂として出てきます。靈魂の聖徳太子は「自分はこの後、懺悔し終わったら聖武天皇に生まれ変わる」といいます。聖武天皇はみなさんご存じの通り、奈良の大仏を作った中心人物です。ですから『日本靈異記』の中では、日本に仏教を定着させた聖徳太子と奈良の大仏を作った聖武天皇は同一人物なのです。先ほど『古事記』が天照大神という祭祀者の靈魂だけに、靈魂というものを特化させたということをしていましたが、『日本靈異記』は、聖徳太子あるいは聖武天皇というところに仏教的聖者の一つの焦点を作りはしますが、重点を置いているのは一般の人々の方で、一般の人々も靈魂になって生まれ変わっていくことを描いていきます。誰でも生まれ変わる、そしてその主体は靈魂であるというイメージを打ち出していくのです。

『万葉集』も少し見てみましょう。これはいわば『日本靈異記』と『古事記』との中間に位置するありようをもっています。高貴な人の靈魂が天を翔るというような歌がいくつもあって印象的なのですが、他方で、じゃあ一般の人はどうなるのかという問題があります。『日本靈異記』は一般の人々を靈魂としてすくい上げていたということを見ました。『万葉集』では、一般の人々をすくい上げるのは実は聖徳太子なのです。『万葉集』は貴人だけでなく庶民までを視野に納めています。その意味で、いわば偏りのない靈魂観を見ることができるといえるかもしれません。天翔る貴人の靈魂というものが沢山あって、他方庶民はどうなるのかというと天翔る靈魂になることができない。じゃあどうなるのかということですが、『万葉集』に挽歌という死者^{ばんか}に対する歌のコーナーがあって、それが『万葉集』の巻二で始まって貴人の靈魂を描こうとし、巻三でいわばもう一回始まって庶民までを含んでいこうとするのです。この巻三の始まりになぜか聖徳太子の歌が出てきます。歌番号415の行路死人歌と呼ばれているものです。行き倒れて死んだ人に聖徳太子が出会い、詠みかけた歌です。これは非常に重要な意味をもっています。「家にあらば妹が手まかむ草枕旅に臥せるこの旅人あはれ」。聖徳太子が死者に対して、

「お前が家にいたらかわいい奥さんの腕を枕にして寝られたらうに、今は草を枕にして寝ている、死んでしまっている。この旅で死んでしまったお前はあわれだ」と詠みかけます。貴人のような綺麗な靈魂にはならないのですが、それを誰かが「あはれ」と見てとってあげないと、どこまでも位置づかない死者となってしまいます。あるいは祟りを起こすかもしれません。そこで出てくるのが聖徳太子で、全くの他人である死者を、通りかかっただけなのに「あはれ」と思ってくれ、非業の死を無常の一つとして捉え直し位置づけてくれる、仏教的な聖者として出てきているということになります。庶民の死を、全く関係のないはずの聖徳太子が「あはれ」といって慰めてくれる。「関係ないなんてことはないんだよ」といって慰めてくれるのです。これは巻二の挽歌に決定的に不足していた仏教的な要素であり、巻三で改めて挽歌を始めるときに不可欠の、象徴的な冒頭歌として聖徳太子の歌が要請された理由だといえます。

（４）仏教の端的な死生観・靈魂観

もう一回整理しますと、靈魂を考えようとするとやはり古代に偏ります。私の話も古代に偏っていると思います。もちろん、原始時代の靈魂の話をするのは史料がないために非常に難しいのです。だから古代に偏ってしまう。私の図でいうと、靈魂というのは一番下（原始時代）にあってずっとその上を支えている。そうではあるけれど、今『古事記』で代表させている神道の部分では、靈魂は特別な存在である天照大御神に局限されてしまうので、靈魂のほとんどの部分は仏教が担っていきます。仏教が、基礎にあった土台としての靈魂の考え方をうまく吸収していったという形になっていると考えることができます。

仏教は靈魂をうまく吸収して広まっていったということも当然あるわけですが、ところが教義上仏教は靈魂を認めません。『日本靈異記』ではばんばん靈魂が出てきて、ああ仏教は靈魂なんだという印象をもつくらい強い印象を与えてくれるテキストなのですが、仏教の理屈面、教理面でいうと靈魂が認められないものになっていきます。これがちょっと不思議というか大問題なのですが、靈魂というものがあるということになると、どうなるか。みな

さんは仏とは何かというイメージを少しはもっていると思います。みなさんがよく知っている言葉でいうと「空」というのがありますよね。空ですから、別のいい方をすると、「それ自体が根拠があってそこにあるというものはないんだ」という考え方です。他との関係で捉える「縁起」といういい方もあります。

こういう考え方と靈魂があるという考え方は完全に衝突しているんですね。ですから教理上は排除されていきます。道元なんかはこの靈魂の考え方は外道だとはっきりといっています。道元はこの図ではこの辺（中世）にいて、下（古代、原始時代）のものを全部切ったわけです。図の一番上にいる近代のわれわれが下の時代を切ろうと思えば全部切ることができるのと同じように、道元は切った。これは人間の力のすごいところで、度外視することができるのです。道元はそれまでの人々がどう考えてきたかという観点ではなくて、仏教の真理という観点で靈魂を切っていくのです。

もう少し緩やかな仏教は、仏教の歴史を考えると、下の全部、例えば印度から中国に渡って朝鮮に渡って日本に来た、その土着のものを全部吸収していく。それがこの下の部分であるわけです。ですから、そういう意味で仏教は下をもっているわけです。下をも認め吸収しないと広まっていけないからです。しかし、それでも教理面では認められないという変なことになっていきます。

教義上、常なるものはないとする立場（空）から靈魂が隠蔽されるのです。そこはなるべく語らないようにしようと。ところが、ほとんどの日本人は仏教を受け入れても下の土台があるので、靈魂を前提にして考えて受け入れたというのが現状になります。仏教者自身「魂」「尊靈」という言葉を使っています。源信のテキスト（『首楞嚴院二十五昧会起請』）に見られます。ところが、主著の『往生要集』には絶対書かないのです。土台としての靈魂は残っているからポロッといつちやうことがあっても、細心の注意を払った主著には絶対書かない。そういう不思議なことが起こります。

九相図（『首書九想詩』のもの）⁽⁷⁾を見てください。小野小町のような絶世の美女でも死んでしまえばこうなってしまう、という絵です。これが仏教の端的な死生観だと思います。一目でわかります。これは白骨化させるための風葬で野ざらしになっています。絶世の美女もしばんで腐ってカラスに食

べられて、髪の毛と骨になってしまう。わかりやすいところで第七図の一つ目の歌を見てください。「皮にこそおと女のいろはあれ骨にはかはれる人がたもなし」、かつこいい・かわいい・きれいなどというのは単なる皮の問題なんだよといっています。死んだら骨になってバラバラになって人の形も留めないんだよと。そんなものになぜ執着するのかという意味でしょう。この九相図では靈魂そのものは絵として描かれていませんが、第九図の一つ目の歌で「鳥べ山すてにし人のあとゝへば塚にはのこる露のこんぱく」とあって、魂魄というのが出てきます。墓になって祀られて、その塚には儚い魂魄が残っているといっています。これは割と普通感覚だと思います。

この絵は仏教の立場から人を脅かすために作られた絵です。『日本靈異記』上巻の序で見たものと通じるところがあります。それにしても、この絵は嫌になってしまいますよね。昔授業でやったら学生さんに怒られたことがあります。私はこんなに悩んでいるのにそんなのひどいといわれてしまいました。仏教には残酷なところもあって、これが事実なんだよと突きつけてくるところがある。無常なんだよと突きつけてくるところがあります。嫌になってしまったらごめんなさい。この九相図というものは非常に沢山作られて、靈魂がはっきり描かれているものもあります。第一図の亡くなったばかりの美女の遺体の上方に靈魂が描かれるようになっていくという路線があるわけです。庶民の靈魂観からすればそれは当然といえます。これは江戸時代まで広く続いていきます。

あとみなさんがよく知っていることとしては、地獄とか極楽ということがあります。図を見てください。これは極楽から阿弥陀如来の一行がお迎えに来てくれた図と様々な地獄で苦しめられている図です。これは『絵入り往生要集』⁽⁸⁾というものですが、こういうものが江戸時代に盛んに印刷されていきます。地獄には何が行ってるのか、靈魂なのか肉体なのか、そのどちらでもないのか、という問題にはよくわからないところがあって、直観的には靈魂が行っているというイメージが強いはずだと思いますが、でも肉体がないと地獄で痛みつけられても平気なのではとか、すっきりしません。教義上はちゃんと理屈が考えられているようです。しかし、庶民が求めるのは細かすぎる理屈ではなく直観的な理解です。やっぱり何かこういう世界があって、そこに行っているということですね。それが実感できればいい。靈魂は教理

的には括弧に入れられる。しかし、庶民の間では当たり前のものとしてずっと続いていったことになります。九相図や地獄・極楽絵図に見られる庶民仏教の靈魂観が中古から近世まで最も普及したものといえるでしょう。

以後大きく捉えれば、靈魂観の歴史は庶民仏教の靈魂観を基軸として、仏教の枠内で成仏を目的としない武士道⁽⁹⁾と、仏教から死・靈魂を取り戻そうとする国学が大きな流れを作っていきます。

（５）近世の武士道、儒学、国学による仏教的死生観・靈魂観の捉え直し

最後に仏教以外の近世の靈魂観です。武士道、儒学については一言述べるだけにしますが、大雑把に言えば武士道、儒学には靈魂というものは出てこないと一応捉えていいのではないかなと思います。

『葉隠』に「死身」というものがあります。『葉隠』というのは主君への過剰な思い、主君への恋ということを強くいうテキストです。主君を恋する。恋して恋して、だけど絶対いわない。告白しない。これが「忍ぶ恋」です。ひたすら主君を思う、主君を中心とする御家（佐賀藩）を思うということが書かれています。「死身」とは戦を待望して、いつでも死ぬる準備・覚悟をしておくというものです。

ここには靈魂はあまり出てきませんが、自分が死んで生まれ変わってもまたこの御家に生まれてこの御家のために働く、決して成仏は求めないといいます。語り手の山本常朝は出家者となっているのにもかかわらずそうにしています。この意味で少しは靈魂が出ているといっていいいかもしれません。

次に儒学ですが、儒学には死がないのです。非常に難しいところですが、儒学は日本で宗教性が薄くなり学問化したということがほぼ定説でいわれていまして⁽¹⁰⁾、伊藤仁斎なんかが儒学の根本テキストを読んでいくと、確かに死はないといってしまうのです。天道・地道・人道は一つの「活物」であって、世界は全体として生きているといい、死そのものを消去してしまうのです。

最後の国学ですが、これが靈魂觀の歴史の中では大きいものとなっていきます。国学者はとにかく『古事記』から考えました。本居宣長が『古事記』の黄泉国説話によって人は死んだらこうなると考え、さらにそうじゃないという形で平田篤胤が出てきます。篤胤は『日本書紀』や祝詞や現在の事実によって、『古事記』を相対化しながら死後の世界を考えていきました。近代になると篤胤の系統から新国学を名乗る民俗学者の柳田國男が出てきます。柳田に至ると『古事記』からは完全に離れて、庶民の伝える信仰を隈なく調査して、そこから日本人の靈魂觀を割り出そうとしました。この三人はともに、仏教の地獄・極楽説を否定しながら、他の根拠によって死後の世界を描き直そうとした思想家であるといえます。

靈魂について考えるときに、日本思想で最も重要になるのは、『日本靈異記』や『古事記』と並んで、平田篤胤の思想だと思います。少しだけですが篤胤の考えたことを見ておきたいと思います。そのために、まずは『古事記』の天地初発から黄泉国説話までの内容を振り返り、その次に宣長の考えたことを見ます。『古事記』はみなさんもご存じだと思うので、思い出すためにざっと振り返ってみましょう。

天地が始まって神様たちが成っていきます。そしてイザナキ・イザナミが成る。二神は天つ神から国土を固め整えなさいと命令を受けます。二神は性的交渉をして、国を生み、神を生みます。イザナミは最後に火神を生んで死んでしまいます。そして黄泉国の箇所ですが、先ほどもいった通り注意深く読まなければいけません。ここに靈魂は一切出てきません。イザナキは黄泉国までイザナミを追いかけて、愛しい私のあなたの命よと呼びかけます。仮に訳してみましたが、現代語にはない、もってまわった表現で絡み合うような愛しさが表現されていますよね。そこでイザナミは黄泉神と話をつけて帰りたい。しかし、待ち切れなくなったイザナキはイザナミの姿を見てしまいます。蛆がイザナミの体に音が聞こえるほどにたかっている、八種の雷神が体に成っていました。その腐り果てた体を見、畏れたイザナキは「やばい」と一目散に逃げます。逃げ足が速くセンスがいいです。イザナミは恥をかかせたなといって、子分に追わせ自分も追いかけます。イザナキは千引きの石で黄泉国への道を塞ぎます。イザナキ・イザナミは千引きの石の両側に立ち、互いに相手の姿を見ぬままに、イザナミから「愛しい私のあなたの命

よ、こんなことをするなら一日千人殺すぞ」、そしてイザナキから「愛しい私のあなたの命よ、それなら一日千五百年生まれさせよう」、という言葉が交わされることになります。

ざっと見てみましたが、この箇所は日本における死の観念について考えるときに必ず参照する場面です。ここに靈魂が全く現れないということをどう評価するかは大きな問題だといえます。今日のお話では靈魂が土台にあるのだと考えてきました。そこから考えると、『古事記』の黄泉国説話は実は非常に変わった設定となっていることがわかってきます。靈魂がないわけですから、『古事記』を読んで「昔の日本人は死について素朴にこう考えたのだ」などということは到底いえません。靈魂を排除することで、イザナミの死は凄絶なものになっています。『古事記』とは、伝来しすでに大きな力をもつ仏教を意識的に排除し、仏教以前の神祇りの感覚を捉え直し、さらにはそれを原理化しようとするテキストなのです。イザナミの体の凄絶さは仏教以前の神祇りの感覚と関わっているでしょう。古代に伝来した仏教が、とうの昔に靈魂を取り込んでおり、一般の人々の靈魂を語るということ自体が極めて仏教的なことであるとすでに感じられていたのでしょう。『古事記』が、『日本書紀』のような靈魂と肉体の分離としての死を描かないのは、「素朴さ」ではなく仏教排除という方法的態度によるものと考えられるのです。

『古事記』黄泉国説話が描く死はイザナミの死です。視点が生者であるイザナキとなっているため、描かれるのは「他者の死」としての死であることになります。本居宣長は、イザナミが死んで黄泉国に行っただけのこと、ということ、自分自身に適用しようとします。そうすると、自分も死んだらこうなる、黄泉の国に行くことになる、と考えるわけです。宣長は『古事記』の「他者の死」を「自己の死」として捉え直して、「人は誰もが死ぬ。善人であれ悪人であれ誰もが穢れた黄泉国へ行かなければならない。だから死ぬことは悲しい」と考えるのです。どんなにいい人でも、悪い人でも、金持ちでも、たった一人で行かなければいけない。これが悲しいといっているのです。

これはかなり変な考え方ではないでしょうか。普通は別れだから死は悲しいのですが、宣長は「他者の死」ではなくて「自己の死」を悲しんでいるわけですね。自分が死んだらこんな汚いところに行っちゃうというのが悲しいという考え方です。宣長は死後の存在を想定しますが、明確に靈魂であるとい

ういい方はしていません。黄泉国に何が行くのかという問題は、先ほど見ました仏教の地獄に何が行くのかという問題と少し似ていますね。宣長のうちは浄土宗だったそうです。また、これも先ほど見た、因果の話に驚いて顔面蒼白でそそくさと帰った人にも似ているような気がします。『日本靈異記』が問題にした悪果としての悪い死に方の問題を、宣長は一般化して考えているようにも見えます。

では、この宣長説を批判した平田篤胤はどう考えているかという、「人は死んでも見えない世界に存在する。死後は、この地にあるが見えない世界である幽冥界に行くだけである」となります。それがどう導かれるかということを説明してみましょう。宣長の弟子服部中庸^{はつとりなかつね}『三大考』の絵とそれを修正した篤胤の『靈の眞柱』^{たま みはしら}の絵を見てください⁽¹¹⁾。

これが何の絵かというとなんて天文学なんです。西洋天文学がどんどん入ってきて、宣長はそういうものを知っています。ところが、自分の『古事記伝』という三十年以上かけて書いた大著の中にはそういう考えを自分では決して書かないのです。自分の弟子の中で、ある種かわいい弟子がいて、その服部中庸に『三大考』を書かせて『古事記伝』の付録として中に入れてしまいます。こうしたことは非常に例外的なことであって、いわば宣長のお墨付きがある著作なわけですが。宣長自身はこういう大胆なことはいわず、学者として慎重なことをいうのに終始しました。ある種ずるいところがある人ですね。実は自分でももっと精密な絵を描いていたということが今はわかっています。

要するに、宣長もこういう『三大考』みたいなことを考えていた。これは何なのかというと、西洋天文学によって、地球があるということがわかってきたわけです。われわれは地球に住んでいるのだと。これは非常に大きいことをもたらしてきます。地球を一周回るとまた同じところに戻って来ちゃうわけです。仏教は、西の方に行けば極楽があるとずっといつてきましたよね。それがなくなっちゃったのです。ですから、西洋天文学をふまえる知識人は、西に極楽があるなんていうけど一周して戻ってくるだけじゃないか、と考えるようになります。近代のわれわれが、知識によって必ずそうやって考える考え方をもった最初の頃の人たちだといえるでしょう。地獄についても、

地面を掘っていてもないじゃないかとそういうことになっちゃう。地獄・極楽はこうして消去されてしまうのです。

その上で、われわれは地球というところにいるらしいのだけど、これは何なんだろうと考えます。今われわれからよく見えるところに太陽というのがあります。それから月というのがあります。この三つが大事なのだといいます。そして、この三つがどうやってできたかは、『古事記』に書いてあるはずだというふうに考えるのです。

宣長と弟子の中庸が一緒になって考えたのが『三大考』です。最初はこの三つはくっついていて、上に伸びて、下に伸びて、ちょん切れて三つになるようにする。上が天、下が^{よみ}泉。太陽が天、月が泉です。真ん中がわれわれのいる地、地球です。地球の中でも日本が一番尊い天に近いから日本も尊いという考え方です。これが上下に引っ張られて、第十図では切れて今は天体として回転している。

これがなんで靈魂の話になるのかということですが、靈魂の話になるのは修正版の篤胤の図においてです。篤胤が何を考えているのかというと、泉と地は昔つながっていた。つながっているときにイザナミは泉へ行った。その後、切れたのだと考えています。ということは、イザナミは生きたまま泉へ行ったことになる。つまりイザナミは死んでいないと篤胤は考えます。泉と地は今や切れてしまっている。だから皇国、日本に住んでいる人たちは死んだとしても、今やあんなに遠い月にまで靈魂になって行けるわけがないと考えるんですね。じゃあ死後の靈魂はどこにいるのかというと、この地球の中にいるということになるわけです。

靈魂の場所というのは、みなさんが今普通に考えるときに、だいたい地球というかわれわれが住んでいる空間と同じ場所にいると考えるか、まだ捉え尽くされていない宇宙の果てにいますと考えるか、二つのパターンがあると思いますが、前者の最初の考え方だと思います。篤胤は、見えないけどここにいるということを考えていくのです。

幽冥界という見えない世界を大国主命が主宰している。顕明界という見える世界を天皇が主宰している。大国主命は見えない世界から、目に見える世界の天皇を補佐している。自分は死んだら大国主命のもとについて、一緒に天皇を中心とするこの世界を助けていく。大国主命が天皇を補佐する一

翼を担って、幽冥界の靈魂も子孫を助けていく。

もうほとんど死後の世界が中心の考え方になっています。篤胤は、幽冥界の方が本来の世界であり、今われわれが生きているのは仮の世なんだとまていいます。死後の世界があるよ。そして生きている間は試されている時間なんだよと。ただ篤胤には微妙なところもあって、この世がとても楽しいとか大好きだとかそういうこともいっちゃう人でもあります。

駆け足で見えてきましたけど最後に、柳田國男をちょっとだけ見ます。柳田は篤胤の系統で、篤胤の場合は天皇がいて大国主命がいて尊い神様がいて、その下に人の靈魂もくっついていくというイメージでした。柳田になると偉い神様は括弧に入れて、われわれの小さいスケールで家の先祖の靈魂ということを考えていきます。靈魂は、最初は一人の靈魂なのですが、三十三年経つともっと大きな、前の代の人たちがみんな入っているような一つの大きな先祖の靈魂に入っていく。先祖の靈魂は、三十三年経つと個性のない一つの靈魂に融合を遂げ、子孫を助けるというのです（『先祖の話』）。これは民俗学で日本全国を調査して、平均値を出してみると三十三年だという主張です。平均値なので、それでいいのかという疑問もあります。いずれにせよ、これははっきり篤胤系の考え方で、それを庶民版にしたものです。庶民は、柳田の用語では常民といいます。柳田が考えたのは常民の靈魂観というものだったわけです。

だいたい大急ぎで見ると、以上のようなものが日本思想の靈魂ということで考えられるものの代表的なものです。結構あるんですよね。みなさんがどう受け止めているかはちょっとわからないところもありますが、靈魂というものはこうやって見てみるとかなりあったし、ずっとあったわけです。最初に書いたこの絵がほとんど全てを説明しているような気がします。われわれはこの時代（近代）を生きているのですが、土台はやっぱりあるのだということですね。

（6）「千と千尋」の靈魂観

こういうことをふまえて、最後に「千と千尋の神隠し」に戻しましょう。

あれ、死がないっていったのですが、実はあるんです。「千と千尋」では実に沢山の人が死んでいるのです。千尋のお父さん・お母さんは豚になりましたよね。豚になってどうなりました。食べられちゃいますよね。お金をもってきた神様たちに食べられます。ということは、死んじゃいますよね。お父さん・お母さんはまだ食べられていなかったのですが、普通は食べられて死んでしまいます。あそこに迷い込んできた人たちはもっと沢山いるはずですよ。千尋の家族だけではないはずですよ。あそこに迷い込んで豚にされた人たちは沢山いるはずなんです。

それから釜箆が出てくる場面を思い出してください。ススワタリが沢山出てきますよね。それが石炭を担いで運んでいました。実は石炭も人なんです。湯婆婆が「石炭にしちまうぞ」といっていましたよね。だからこれは石炭にされた人たちなのです。油屋の料理はそういうものによってできています。材料も火力も人でできています。それが豪華な料理になって、人間世界から疎外されてやってきた神様たちに出されている。だから大変な数の死者がいるのです。もちろん純粋な人間かどうかはわからないところもありますが。

湯婆婆はとてつもない人殺しでもあるんです。自分が手を下すわけではなくて間接的ですけど。結局これで何がいえるのかというと、千尋のお父さん・お母さんの場合で考えると、お父さん・お母さんは自分は千尋の父の誰々、母の誰々だっという意識はあったはずですよ。ところが豚になるとその意識はなくなっていましたよね。豚小屋の場面を思い出してください。豚になると自分が誰だかわからなくなってしまう。そして、普通なら、わからなくなったまま食べられて死んでしまいます。

今日お話ししてきた靈魂ということで考えると、死が肉体と靈魂の分離であり、肉体は食べられても何かが残るとしたら靈魂は残るでしょう。重層しているなら、なおさら残ると考えられるでしょう。しかし、この場合、靈魂になったときに自分が誰だかわからなくなっています。死んで靈魂になっているのに、なんだか、「あれ？ 自分は何だったんだろう？ なんでこうなっているんだろう？」と何もわからなくなってしまう。こういう人というか靈魂が無数にいるわけです。

あの映画の中でカオナシっていうのが出てきますよね。カオナシって何なんだというのがあの映画を観る上での大問題になってくるんですが、顔がな

い、つまり自分が誰だかわからない。そういう死んだ人たち、そしてあれは色からして靈魂だと思うのですが、そういう人たちがいるとしたら、それが集まってカオナシになっているのだろうということです。

あの映画では他にも戦争で死んだ人たちが海の列車に乗っていますよね。靈魂になって。沼原という駅でそういう人たちだけ降りていきます。これは宮崎駿が戦争を背負っている、戦争の死者とか靈魂を背負っているということだと思います。

カオナシについては宮崎駿がそういつてるとかそういう話ではなくて、何を描いてしまったのかということをおのれ自身がどうもわかっていないのです。それを作品の中で考えるとこうなるよというお話をしてみました。もっと作家論的にいうとカオナシは宮崎駿そのものだともいえますが、それは省略します。いずれにせよ沢山の靈魂が出てくる映画なんです。宮崎駿はあの海の列車のシーンだけが描きたかったといっています。それほど強いものなのです。宮崎駿は無意識的な表現をよくする人です。宮崎駿はしゃべると妙に道徳的になったり、妙に抜け殻的になったりして、いっていることは信用ならない人なのですが、芸術家の本分としての作品を見る限り、靈魂が非常に沢山出てきているということがわかります⁽¹²⁾。

これで、やっと最初にやるとお約束した「千と千尋の神隠し」の中の死、そして靈魂の話にまで辿り着きました。こういう意味で、隠されてこそいですが靈魂はわれわれにとっていまだ身近な存在なのかもしれません。

内容的に多岐にわたりまして、まとまりのないお話になりましたが、靈魂ということのでいろいろなことを考えることができるということだけは伝わったのではないかと思います。ご静聴ありがとうございました。

注

- (1) 佐藤正英『日本倫理思想史』東京大学出版会、平成 15 年、増補改訂版、平成 24 年。
- (2) 松木武彦『列島創世記』（全集日本の歴史第 1 巻）小学館、平成 19 年、113 頁。
- (3) 注 2 掲書、124 頁、138 頁。
- (4) 吉田真樹「死と生の祀りーイザナキ・イザナミ神話における生命思想ー」『季刊日本思想史』62 号、ペリかん社、平成 14 年。

日本思想における靈魂の問題（吉田）

- (5) 『日本靈異記』の引用は、小泉道校注『日本靈異記』（新潮日本古典集成、昭和 59 年）に拠り、一部訓み下した。
- (6) 吉田真樹『『日本靈異記』冒頭話の孕むもの（上・下）』（『思想史研究』6・11 号、日本思想史・思想論研究会、平成 18・22 年）参照。
- (7) 初尾武校注『玉造小町子辻衰書』（岩波文庫、平成 6 年）所収。なお、本稿で触れられなかった『源氏物語』の死生観・靈魂観については以下を参照してほしい。吉田真樹『『源氏物語』における死と生』『死生学研究』2003 年春号、東京大学大学院人文社会系研究科、平成 15 年
(<http://repository.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/dspace/handle/2261/20456> で閲覧可能)。及び吉田真樹「六条御息所の生靈化の基底について」『季刊日本思想史』80 号、ペリカン社、平成 24 年。
- (8) 西田直樹『「仮名書き絵入り往生要集」の成立と展開—研究篇・資料篇』（和泉書院、平成 13 年）所収の『極楽物語』（古版）や『ゑ入往生要集』（寛文十一年版）などを参照。
- (9) 『甲陽軍鑑』品四には、坐禅修行中の武田信玄が、武士は本分として成仏を目指すべきでなく『碧巖録』十巻中七巻までしか参ずるべきでないと師から指導されたことが記される。佐藤正英校訂訳『甲陽軍鑑』（ちくま学芸文庫、平成 18 年）参照。
- (10) ただし、田世民『近世日本における儒礼受容の研究』（ペリカン社、平成 24 年）のよ
うに、近世儒学には宗教性が欠けているとする通説を再考する研究も出てきている。
- (11) 吉田真樹『平田篤胤—靈魂のゆくえ』講談社、平成 21 年、176－179 頁。なお、本書の補論として以下も参照してほしい。吉田真樹「近世庶民仏教思想と和辻思想史図式の捉え直し（上・中・下 I）」『思想史研究』12・14・17 号、日本思想史・思想論研究会、平成 22・23・25 年。
- (12) 吉田真樹「カオナシのゆくえ」『本』2009 年 2 月号、講談社、平成 21 年。

※本稿は、平成 25 年 6 月 29 日の国士舘大学倫理学専攻講演会での講演記録に基づいて、当日の雰囲気や損なわないことを前提に整理し、不十分だった点について多少考察を補ったものである。当日は会場の内外で倫理学専攻の学生のみなさんから優れた質問を多数受けた。感謝する。